

法学研究所主催

21世紀の日本と世界—政治学科新設シンポジウム開催

安倍晋三氏ら3氏が講演

来春、スタートする法学部政治学科の新設シンポジウム(法学研究所=晴山一穂所長=主催)が開催され、自民の安倍晋三幹事長代理(その後、第3次小泉改造内閣で官房長官に初入閣)、先の総選挙で初当選を果たした中根一幸氏(平12院法修)らが講演。本学関係者のほか報道関係者が詰めかけた。末次俊之さん(法学研究科博士後期課程)にレポートしてもらった。

10月22日、神田キャンパスで、法学部政治学科新設に伴うシンポジウムが行われた。開催に先立って、主催者側を代表して、木幡文徳法学部長から、平成18年4月に開設される政治学科の特色、具体的には少人数教育、語学重視、そしてセメスター制の導入などが述べられた。

シンポジウムの題目は「21世紀の日本と世界—政治学教育に期待するもの」であった。当日の講師は猪口孝中央大学教授、中根一幸衆議院議員および安倍晋三衆議院議員で、司会は本学の藤本一美法学部教授が務めた。

まず猪口氏は、現代の日本社会における大きな変化を指摘し、政治学がその変化の解明に際して有効な学問でありうることを述べた。また、日本の法学部教育における欠陥にふれ、安上がりで大量生産方式の学生育成に苦言を呈し、環境の変化に伴った新しい教育体制の確立が重要であると力説した。

次いで中根氏は、自身が政治家にあこがれた経緯を述べ、市議会議員選挙、市長選挙そして先の衆議院議員選挙の体験を披露し、時代の変化に伴って若い人々の政治に対する関心が芽生えていることを述べた。また、現在の法学部における政治学教育の問題点もあわせて指摘した。なお、中根氏は本学の法学研究科において“オンブズマン制度”で修士号を取得している。

最後に安倍氏は人口構造の変化に伴う少子化問題、年金問題、行財政改革におけるリーダーシップの重要性を述べ、小泉内閣の下での政治改革の一層の進展と問題点を指摘した。また、アジア各国との関係について、国際関係における経済の重要性を述べ、アジアとしての一体感を高める必要があることを指摘した。

会場の301号教室には、テレビ局各社などマスコミ関係者が詰めかけ、“次期首相”と目されている安倍氏の講演の模様を、熱心にメモを取っていた。法学部の学生、臨床政治学会の会員および一般の市民約300人が熱心に聴講し、盛況のうちに終了した。

なお、今回のシンポジウムの内容は、当日夜9時のNHKのニュースで放映されたほか、翌日の朝日新聞など各紙で取り上げられた。



約300人の参加者を前に持論を展開する壇上の安倍氏
(左から藤本教授、中根議員、猪口氏)

地域経済における研究所・企業の役割

日韓の地域課題を討論

商学研究所と韓国・慶南大が公開シンポ

国際公開シンポジウム「地域経済における研究所・企業の役割—日韓の取組み—」が、専修大学商学研究所・大学院商学研究科と、商学研究所と組織間協定を結んでいる韓国慶南大学地域問題研究院の共催により、10月22日に神田キャンパスで開催された。

当日は多数の参加者から多くの質疑が出され、活発な討論を展開した。



会場の質問に答える上田商学研究所長(左端)

上田和勇商学研究所長は「社会や地域が、いま何を期待しているのか。その期待に応える研究活動が必要だ」と強調。05年に内閣

府が実施した世論調査で、地域が期待する施策の第1位になった「防犯・防災対策の充実」が重要課題だと指摘。これまでの防災教育、対策研究を振り返りながら、地域と連携した研究の促進が必要だと述べた。

日本興亜損害保険CSR室の岩坂健志氏は同社の「日本興亜おもいやり倶楽部」のスタッフと、ハヶ岳山麓の国有林で「森林体験教室」などを開き、森の整備・育成、森林療法の研究や商学研究所と協働でリスクマネジメントの研究を進めていることを紹介。直接に企業利益とは結びつかないが、やがて災害リスクを防ぐという課題につながるの考え方を示した。

成泰鉉韓国慶南大学地域問題研究院長は、「地域社会発展のためのシンクタンク」として94年に設立された同研究院の組織、研究内容、事業の推進戦略などを紹介。行政と連動した広範な研究の展開を明らかにした。

最後に見目洋子商学部助教授が「多摩地区における商学研究所の3年間の活動」を振り返りながら、大学が自治体と連携し、まちづくり、区民生活や生涯教育などの課題に取り組むことの重要性、また地域問題に取り組む学生力(企画、実践、交流、プレゼン)強化の必要性をアピールした。

商学研究所プロジェクト主催

「経営の新潮流」公開シンポジウム

商学研究所プロジェクトによる「経営の新潮流」公開シンポジウムが「企業の社会的責任とは何か—コーポレートガバナンスと企業倫理を中心に—」を共通テーマとして、11月5日に神田キャンパスで開催された。

赤羽新太郎商学部教授の司会で、初めに中村瑞穂作新学院大学大学院教授が「企業の社会的責任を考える」と題して講演。わが国をはじめ欧米での企業、企業人などがこれまで同問題に対してどのような見解を表明し取り組んできたか、その流れを追いながら「真の社会的責任とは何か」を問題提起した。

次に水村典弘埼玉大学助教授が「企業の社会的責任の理論動向について」と題して、現代資本主義経済のなかで、上場企業の活動のうち「何が良くて、何が悪いのか」を中心に論及。12月10日から公開される映画「THE CORPORATION」や、ベイカンの「公開企業—利潤と権力の病理的な追求」論などを例に、各国での理論構築の現状を紹介した。

最後に吉森賢放送大学教授が「企業の社会的責任の日米欧比較—コーポレートガバナンスと企業倫理—」と題して、フォードやトヨタなど、各国の代表的経営者の企業統治への考え方を歴史的に紹介しながら「株主至上主義は少数派となり、経営者は利潤追求だけでなく、従業員、地域社会に対しても企業責任を持つという考え方に変わってきている」と指摘。

遅れている日本企業の現状に触れ「① 従業員福祉への倫理的責任感の不足 ② 企業の成員および家族の支配と隷属化 ③ 家庭の崩壊と社会的費用の増大」をもたらしていることを挙げた。

このあと貫隆夫大東文化大学教授がまとめの講評を行い、会場からの質問を受け、活発な討論が続いた。



赤羽新太郎教授



中村瑞穂教授



水村典弘助教授



吉森賢教授



貫隆夫教授

エクステンションセンター公開講座

災害と疫病で紐解く相模・武蔵の歴史

関心高く2600人が受講

エクステンションセンター公開講座「災害と疫病で紐解く 相模・武蔵の歴史」が10月8日から11月12日まで生田キャンパスで毎土曜日に開講され、延べ2600人が受講した。

10月8日の午前中は、土生田純之文学部教授が「古墳時代の自然災害と復興」と題して講演。近い将来、大地震発生が予測される中、「地震考古学」や「火山考古学」から過去の自然災害と復興の実態を現在に結びつけて説明した。

特に富士山、浅間山の噴火による遺跡古墳の実態を考古学、層位学の立場から見た分析を基に詳細に伝えた。

午後には、荒木敏夫文学部長が「古代の富士山噴火と富士信仰」と題して講演。「ひのものとくに」を「日本」と呼ぶようになったのは7世紀末頃からというくだりから始まり、古代の富士山は万葉集の中で「日本の大和の国の鎮めとも」、竹取物語で「天に近い山」と崇められ、1052年(永承7年)に末代上人(12世紀中葉の僧侶で富士修験道の開祖)が山頂に「大日堂」という仏閣を構営し、富士信仰を広げていった経緯などを論じた。



過去の自然災害と復興の実態を解説する土生田教授



荒木文学部長

第39回文学部公開講座

「心、その不可思議なもの」

市民、学生ら熱心に聴講

第39回文学部公開講座「心、その不可思議なもの」が10月1日、生田キャンパスで行われた。市民、学生ら156人が出席し、盛況だった。

高田夏子助教授(人格心理学)は「昔話からみた心的世界」と題し、日本とヨーロッパの昔話を比較し、昔話に表れる心理を検証。聖マリアンナ医科大学神経精神科講師の二宮正人氏(精神医学)は「モーリス・センダックの絵本に見る無意識」をテーマに、絵本をプロジェクターに映しながら、文章や絵だけでなく絵の大きさや位置などに込められた意図、読者が受ける心理などを読み解いた。「ものを通して知る心—無意識の心の働き—」をテーマとした乾吉佑教授(臨床心理学)の講演では、心理学、心理療法の祖であるフロイトの分析方法や概念を織り交ぜながら無意識下の心の動きを解説した。



高田夏子助教授



二宮正人氏



乾吉佑教授